

内科同窓会リレーエッセイ

ブラック・ジャックを読み返して

杏林大学医学部附属病院副病院長
杏林大学医学部消化器内科学 教授
久松理一

70回生の久松理一（ひさまつ ただかず）です。紹介いただいた防衛医科大学校の穂苺量太教授とは同級生で学生時代から互いの秘密を握りあっています。さらに消化器内科。炎症性腸疾患と専門も同じなので今も学会や厚労省 IBD 研究班と一緒に頑張っている間柄です。ですから彼からの依頼はどんなに無茶ぶりでも断ることはできません。

2015年に杏林大学医学部消化器内科教授として赴任し、2016年から主任教授として教室を任されています。徐々に医学部や病院の仕事を頼まれることも多くなりました。その中でも医学部の学生教育業務に携わることも多く、3年生から卒業までの4年間の学年主担任も経験しました。そのときに勉強が思うように進まない学生、進路に悩む学生などいろいろ相談も受けましたが、いちばん気になったのは途中でモチベーションが切れてしまう学生の存在でした。医学部の留年、退学者が増えているという問題は大学によって差はあっても全国医学部に共通の問題のようです。2017年の東洋経済という雑誌にも医学部バブルの問題として特集されていました。入試の偏差値は上昇しており、単純に言って学力的にはより優秀な人たちが医学部に入ってくるようになってきているはずですが、入試の時の学力がそのまま医師としての力量に反映するとは限らないということは明白で、6年間をどう過ごすのかのほうの影響は大きいと思います。途中でモチベーションが切れてしまう学生に共通するのは医学のもつ生命科学としての面白さ、医師としての社会的重要性、などを見失ってしまっていることだと感じました。現在の医学部のカリキュラムは膨大な量をこなさなければなりませんので学生も大変です。年間スケジュールは教員側の私でも見るだけでうんざりするぐらいです。そこで数年前から特別授業（もちろん試験とかはない！）として手塚治虫のブラック・ジャック（BJ）を題材に使って授業をしています。私が医師を目指した理由は小学生の時に読んだ手塚治虫のBJを読んだからです。これは本当の話で医学部の入試面接でもそのように言ったら、面接官の先生に「無免許医になりたいの？」と笑われたのを覚えています。じつは私から10年ぐらい先輩までの世代は“BJ世代”と言われBJの影響を受けて医師を目指した人が多いということのはちに知りました。自分が影響を受けたのだから何か今の学生にも響くものがあるのではないかなと思った次第です。BJは今読み返しても色褪せておらず、COVID-19を連想させる話、医療とコンピューターの関係（今でいうAI）を扱った話、終末期医療や老いを扱った話など現代医療の問題点を予見し

たような話がたくさんあります。そのなかで特に私が大好きなセリフで『もし人の命を救って、その人の人生を変えたなら、もしかしたら歴史だって変わるかもしれないだろう?』というのがあります。学生にも「君たちは歴史を変えうる仕事に就くのだよ、だから医学部というところは特別なんだ」、と話しています。せっかく（高い学費を払ってもらって）医学部に来たのだから6年間医学を満喫して楽しく充実した学生生活を送って欲しいなと思っています。ちょうど医学部生は自分の子供たちと同じ世代です。こんなエッセイを書いたのも三浦総一郎先生がおっしゃられた親世代だからかもしれません。

さて、次回、私からご紹介させていただく先生は東京医科大学腎臓内科の菅野義彦教授です。菅野教授も私の同級生で高校時代（慶應義塾高等学校）も同じクラスでよく遊びました。現在も専門分野は違いますが内科研修プログラムなどでいろいろ相談する機会が多い頼れる友人です。